

遺伝と環境

——デュリック・フリーマンのマーガレット・ミード
批判に寄せて——

足立寿美



『ラマ、それじゃお宅ではお子さん達のつき会いには一切口出ししないわけ？ ヒンズー教について話し合う機会というのは特別にはないの？』

ラマは毎朝五時起床、一時間から二時間にわたるメデイテーションで一日の生活をはじめるヒンズー教徒、何百年にもわたって続いているブラーメン家系出の優秀な化学者である。アメリカ政府税金監査役としてサリーの

裾を翻して働く夫人との間に十五才の女の子と十八才の男の子がある。二人揃って学業に秀いでいるだけでなくハンバーガー、ホット・ドッグ、ピッツァといったファースト・フードが常食のティーン・エイジャーと交わりつつ美食主義を守り、品行方正の見本であった。ここ数年、事あるごとにこの二人の成育ぶりについて見ききしながら、すでに十五年に近いアメリカ生活にもかかわらずインド人としての風俗習慣を保ち続ける様子に、これは矢張り何百年にもなる遺伝子を持つ力のせいかと感嘆しつつ教育方法の秘訣は何かと尋ね探る。そんな質問にラマは一度ならず「まず何よりも自分の子供といえども一人の個人である事実を目を開いていること。ヒンズー教はこうした個人がそれぞれ持つ特定の要求に基づいて生活

法と信仰を獲得していく立場に立つこと。従ってこれと
きまつた教理があるわけではなく、尊ばれる権威が存在す
るわけでもなく、寺院・教会に属することもない……”
との基本的立場を説明しては“自分の親の立場というの
は、何よりも与えられた責任・義務を果すことにある。

献身的に全力を尽してこの行為を営むことに自分の幸わ
せがあるのであつて決してそうすることで特定の目的に
達するとか或る種の結果を求めることはない。何故なら
ば人の一生はカルマによるのだから”と云い含めるのだ
つた。十五才で祖父の選択したラマに嫁ぎ、育児に献身
した後、夫の助言に導つて高校の検定試験を受けてアメ
リカ州立大学に入学、“クラスが忙しくつて家の掃除が
行き届かないの。これでいいのかしら？”と気にしてい
る間に見事な成績で卒業して不況の中で職につけない現
役を抜くと政府税理監視人、タックス・オーディターと
の安定した職を獲得、成程中卒といつてもインドブラー
メンの教学教師を父にもちだけのことはあると血統の強
さを思わされた夫人は“ラマの云う通りよ。私はもっぱ

ら話し相手を務めるだけ”と言葉を合わせた。親の知恵
を手探りする私の脳理には“マミー、私矢張り将来医
者になるより仕方がないわ”と云いはじめた十三才の娘
の姿があつた。医者になるでなく医者になるより、おまけ
がつくのは、継父が医学部教職につく身で機会のあるこ
とに代々医者の家系なのだからとこちらの目くばせを完
全無視して将来を押し売りし、講義中にバツハをスキ
用具製造メーカーの名前と思ひ込んでいる学生とか、カ
ント・ショーペンハウワー・ヘーゲルを知らない大学院
生と接触するたびにそれこそ怒りに燃えてアメリカの教
育への批判となり環境批判となつて、娘の生活改善生活
環境コントロールと飛び出した。“読むべき本のリストを
つくつてじゅんじゅん読ませるように”、“歴史の理解な
しに数学ばかり出来た所でしようがない。学校にやらな
くてもいいから適任者を探し出して勉強させるように”、
“考える訓練、学校ではこれをどう考えているのかね”。
原則的には親としていづれも重大関心事であるもののあ
れやこれやと監視人の役を務めたくないもので、又娘を

がんにがらめに虜にしたくないものでついつい生返事をし受け身で流している中に環境をはさんでの夫婦争いとなる。親の環境づくりは娘が毎日過す学校、学校友達教師への手厳しい批判の上に成り立つのであったから彼女を孤独にし、それを憂う私はラマの助けがほしかった。

こうして対照的な男親二人のこのアメリカという生活環境の中で子供を育てていく姿勢に思いをめぐらせている最中に週刊誌、科学月刊紙が有名な人類学者マーガレット・ミードに関する記事を掲載した。数多い業績を残したこの学者のはじめての現地研究、専門書としてだけでなく一般教養書として広く今も読まれている *Coming of Age in Samoa* が未熟な研究方法の結果、現実とは無関係な社会・文化を描き出しているという。ちなみにミードのこの研究は一九二五年本の出版は一九二八年のことである。火の元は長年に渡ってサモア島で生活しその言葉にも通じて地元の人々から社会の一員として受け入れられているサモア文化の権威者デリック・フリーマン博士の書いた本だった。文化人類学者が同じ文化を

研究し現地でデータを収集した後、異った解釈に達することは左程稀でもなかったから「こんなことだったのか……」とかなり気軽にこの出来事を読み流していたのだが急に焦点を合わせて読み改めてみる心構えになった直接の原因は、日頃から親しいつき合いのある尊敬している学者が『私は以前から彼女の非科学的方法に疑問を感じていたのよ。まあこれでやっと……』とそれこそ鬼の首でもとったようなとの表現がビタリと合う嘲りと憎しみと勝利感の混じった笑い声のせいだった。彼女の理解しかねる反応に、一九七八年治療のしようもないまでに進行した癌を注射で痛みを押えつつ、朦朧とした時間の合い間に現われる意識の明らかな時を縫い継いで仕事のスケージュールを組む中に一生を終えたマーガレット・ミードの姿を思いつつ、長年にわたる環境を強調する研究傾向から再び遺伝というものにスポット・ライトが移動しはじめて、*sociobiology* (社会生物学) がむっくりと体を起こした現在の風潮の中で『遺伝と環境』についてあらためて注目する。

Coming of Age in Samoa と共に若いヤーガレット・

ミードは人類学者として華々しいスタートを切る。この研究が当時の「環境と発生的特質をめぐる論争」、つまり氏か育ちかをめぐる議論に見事なとどめをさすことになったからだ。ミードの仕事はこうして遺伝決定論者の口を封じると同時に文化環境論登場の機会を提供する重大な役割りを果たした。

遺伝に関する知識と人種改善に適應しようとの考えはその昔から存在した。ノーベル賞受賞者の精子を収集する人は我が家から二十分足らずの町に住んでいるのであるが、彼のアイディアを一概にけなすわけにもゆくまい。方法はともあれその考えは旧約聖書に現われブラトの『リパブリック』の中でも人間の改善にむかって常に選択のなされる社会を理想としている。云うまでもなくチャールズ・ダーウィンはこれを進化の方法とみた。この進化論に基づいて人間自らの手にその進化過程を部分的ながら方向づけてゆく力があるのではないかとほめかしたのはダーウィンの従弟である才能豊かな科学者

フランシス・ギアルトンで、彼は有名家系、双子研究を手がけその結果を統計的に処理するなどバイオニアの役割を果たした。心理学にしる社会学にしる人類学にしるまだ下地のなかった時のことだった。彼の関心はロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジの優生学講座の学者カール・ピアソンに引き継がれるのだが、優秀なこの数学者は人間の情緒精神発達に及ぼす環境の影響はゼロに近いとの立場にたって貧困階級における出生率の高さを文明への危機とみた。ピアソンの優生学はそのままアメリカ優生学会に受け入れられ又ヒットラーによって思うままに使われる。

さてアメリカ優生学会の設立は一九二六年で白人中でも特に比欧系白人の優生を唱えた。生活環境の人間に及ぼす影響についてこれといった理論もなく測定方法のなかった時代であり、ましてそれをコントロールすることの困難など気のつかなかった時期である。そこで上流階級は遺伝的に優れた特性をもつのであるから当然のことと支配権を握るべきであるとの見解をとった。

遺伝決定論者の意見に真向うから對抗したのは他ならぬマーガレット・ミードの先生、フランツ・ボアズで、文化の多様性に視点を合わせた彼はそこに人間行動の複雑さの原因を求めた。つまり、人間行動はその育つていた環境によって形造られるとの説である。『菊と刀』の著者、ルース・ベネディクトはボアズ博士の助手であった。選択的交配、淘汰によって人種改善をねらい実際的手段として劣性を示す個人の断種、より劣った人種グループの移民制限を唱えるのに対して反論をするためにボアズ教授は環境論を証明する材料を必要とし若い学生マーガレット・ミードがその役割を果たすことになるのであった。六冊の部厚いノート・ブックとカーボン紙、タイプ用紙にタイプライター、これにカメラを携えてサモアに到着したミードは九ヶ月の後近代社会におけるそれとは対象的な平和で穏やかな思春期を観察し寛容で自由な性への態度をみる。そうしてこれらの独特な傾向を生み出したサモア島の安易な生活振りを描いて「幾人かの恋人を持って出来るだけ長期間生活し、それから自分の

生れた村で結婚する。親の身近に生活の場を得て多くの子供を持つこと、これが皆一様に抱く夢である」との結論を出した。

育つていく環境が個人発達、特に人間的一般傾向の強くみられる思春期の特応を生み出す、これは貴重な発見である。そうして又人類学そのものを方向づけて遺伝というものから文化・社会・価値感へと研究の焦点が移って環境の及ぼす影響というものが人間行動の理解に必須となったのだった。こんな風に社会的にユニークと役割を果たした研究の後、マーガレット・ミードはフロイド、ピアジェと共に原始人と子供の特質に共通点のあることを指摘する点に注目してそれでは原始人の子供達はどうなものと次の分野にすすみ、さらに親子関係、育児様式の比較研究へと進んでいく。今や一般用語となつてこれらの人間関係であるが当時の人類学者は子供、女というものに関心のなかった事実を忘れてはならない。

ここで話を戻してフリーマン博士のマーガレット・ミード批判に触れておこう。彼の描くサモア島の思春期は

この時期独特の反抗的特性を示し、ヒューリタンの性態度をもつ。又平和で寛容な親のかわりに子供を手荒く取扱ひ競争心の強い親が姿を現わす。フリーマンはミードとの観察の差として若い未熟な経験の欠く研究者がサモアの少女達として「外来者がみたい、ききたいと思つてゐることを察してそれを物語る」ことになったと云う。マーガレット・ミード自身、自分の処女研究にみられる欠点に生前から気付いていたことであつたようだ。

当時の様子を知りたいと、博士の自伝『ブラックベリ・ウィンター』を開いて感じることは、新しい分野から新しい分野へと次々にパイオニア的仕事を続けた学者のさすがにと思はれる線の太さと直観の鋭さである。ミードの著書は極度に専門用語の少いこと、理論が簡明であることが目につくが、自伝も又同じように大力による直断である。一つ一つ段階をふまえて厳密に計画し動きを決めるというよりは、その嗅覚によつて大目的に体をむけると後はがむしゃらに進んでいく様を博士自身の文章で辿つてみよう。

『研究分野の選択、どの問題と取り組むかそれは私自身の決定によるのではなく最終的にはボアズ博士にあり、先生は私に思春期についての研究を望んでいました。博士は当時一つの研究方法をつくり出す政治科学者の人生の中でおこる分岐点に達していたのです。つまり、どの社会といえども孤立状態で発展するのでなく他の人間、他の社会から影響を受け異った技術水準によつて影響される事実を証明する研究は十分にされたこと、今や研究中心を個人発達において個人が育つていく特定の文化と結びつける研究課題と取り組む時期に至つたとの決定とされたのです。……………サモアに向う船の上で私は、これから取組むフィールド・ワークの重要性、又それについて書くことが持つ意味をそれこそぼんやりと認識したのです。人類学者になろうとの私自身の決心は科学者は芸術家とちがつて特別に偉大な才能に恵まれていなくとも一応の貢献の可能なこと、もう一つにはボアズ先生とルース・ベネディクトから伝ってくる一種の緊急性によるのでした。近代文化の浸入によつて世界の

中心から離れたような場所ですから生活 방식が消えつつある、“今”記録しておかなければそれらは永久に消えてしまう。他の問題は後に廻すことも可能だがこれだけは最も緊急を要する……………所がこのフィールド・ワークについてはそれこそ何も知らなかったのです。サモアの思春期の少女達について研究することに同意した後、半時間にわたる指示を受けただけだったのです。つまり私はただじっと坐ってきくことに時間をかける心構えでいなければならぬこと、然し文化を全体的に捉えようとする民族研究に時間を浪費しないこと。こうした態度で①いかに若い女の子が慣習の加える制限コントロールに反応するか、②未開社会にみられる女性の恥じらいを示す行動、③若い女性の一目ぼれ行動について観察をするようにといわれたのです。心理学でサンプルの使用法、テスト、行動の組織的記録法について知識があったとはいえ、言葉の上でのハンディキャップをかかえつつ未開社会での人間行動の記録についてきいたこともない考えられたこともない方法を見出さなければならま

せんでした」

Coming of Age In Samoa’ どうやらこの研究はフリーマン博士の批判とは別に果すべき役割を無事に務めて上げたようだ。このところ機会を掴んで「ね、どう思われますか？」と尋ねて、マーガレット・ミードを敵視する人が少くないことに気付いているが、こうした個人的感情と博士の業績とは別物であろう。文化とパーソナリティ、性格形成という問題はこの鍛まししい女学者の仕事ぬきには考えられないのであるから。

我が家の環境抵抗策はこの所一段と複雑で多様となった。ことのほじまりは他ならないラマのお嬢さんが高校にあるフェミニスト・グループに加ったせいで戦闘意識にもえ急に独立宣言的行動が現われたことによる。一年間インドからイギリスにと……「ラマが案じる様子にかなりの鼻息と察して同情する。こうした中で二家族揃って『ガンジー』の映画見物に出掛けると来年スタンフォード大学カルフォニア工科大学と最も難関な大学を

目指す高校生は又一段と魅力的な濃い睫毛のティーン・エイジャーになっていた。父親と母親への甘えがブンブンするさまのラマの最近の憂いはひよっとするといつまでも娘を一人占めにしておきたい男親の……とも思わないうけでもなかった。が、車に乗って間もなく成程とうなずいた。挨拶を終えると同時に、細い金のイヤリングはすつぽりとステンレスのイアーホンにおおわれる。ガンジの無抵抗主義の現インドにおける位置について会話をしている外人三人を無視してウォークマンからきこえてくる音楽の切れ目にひょいひょいと片耳からステンレスを持ち上げてラマに話しかける。劇場に辿り着くとすぐさまポップ・コーンとコカコーラを買うお金と母に手をつき出した。長い映画だからと一緒に手洗いにゆくとジューパンの後ポケットに突込んだヘアブラッシュを抜いて腰まである長い髪をすき上げる。鏡の中で眼が行き合うと心底から親し気な笑顔をみせた。帰り途揃ってヒンズー教を信じるアメリカ若者群が経営している菜食料理店に出掛けるとそこで客が好きなものを自由に皿に

つぐキアフテリア式であった。料理にはからみのつよいものに印がつき“どうぞ自由に好きなだけ召し上って下さい。食物を捨てないですむように食べられる量だけ取って下さい”と大きなサインが出ている。家の子はなめ上げたように皿をきれいに食べ上げた。アメリカ式ティーン・エイジャーはつつくようにした後でかなり多量を残す。母親の注意に“だって食べてみなければ好きか嫌いかわからないじゃない?”、成程それもそうだと思ふ。こんな半日を過した後“ね、私と彼女の行動、同じにみえる?”と娘は父親に伺いを立てていた。

中学の校長先生から電話がかかった。“お目出とう……”といわれて娘がこの間地方賞をもらった作文がカルフォルニア州のコンテストにも入選したと知る。先生に誇りですといわれた子を前にして父親は眉をしかめるのだ、“文章はいい、情報は盛り沢山だ。但しこの中で君自身の立場とか考えを出している部分はどの位あると思ふ?”もう一度書き直すのだ。“沢山の大人の聴衆の前で読んだ拍手をうけてエッセイを手にした娘は勉強部屋

の扉を閉める。もう済んだことなのだから余程のことやる動機がないことだろうと同情しつつ赤ン坊のことから外界刺激に十分に反応しつつ内的安定感をガッシリと持ち続けている生れつきの傾向に頼んで、なんとかかなり異質の親の要求願いに損われることなく思春期を育ってほしいと祈る気持である。

(註。この原稿を書くにあたってマーガレット・ミードの著作、科学雑誌サイエンス八三のボォース・レンズバーガーの原稿を参考にしました。)

☆筆者は米国在住、チェコスロバキアの医師の妻、児童研究者。

マーガレット・ミード著『サモアの思春期』は、蒼樹書房刊。自伝『女として人類学者として』は、平凡社から出版されています。なお、マーガレット・ミード批判の書は、

Durik Freeman 著の Margette Mead and Samoa

